

日本アンダーライティング協会

第73回教育講習会

がん既往者のリスク評価テーマに

日本アンダーライティング協会は11月16日、第73回教育講習会を開催した。ミュンヘン再保険会社シンガポール支店チーフメディカルオフィサーのアンドレアス・アルムス氏 (Dr. Andreas Arnus) が、「がん既往者のリスク評価における課題と解決策―最新の医療進歩と技術評価に関する考察」をテーマに講演した。当日は109人が参加した。

同氏の講演内容の構成は、①がんのスクリーニングおよびサーベイランスの進歩―リキッドバイオプシー②がん既往歴のある申込者のリスク評価方法③がん評価方法の進展④大腸がんの評価に関する実践的考察⑤質疑応答。



アルムス氏

①では、バイオプシー (生検) は、生体から組織片や細胞のサンプルを採取し、病理組織学的に検査をすることとした上で、リキッドバイオプシーは、血液サンプルを用いて血中循環腫瘍細胞や血中循環腫瘍DNAなどを調べる検査で、従来のバイオプシーよりも非侵襲的であることから被験者の身体的負担が軽減されることが期待されている。

ミュンヘン再保険のアルムス氏が講演

ランス▽予後予測▽スクリーニングが挙げられるとした。スクリーニングには多重がん検出検査 (MCEED=Multiple cancer early detection) があり、がん細胞によって放出される、またはがん細胞の存在によ

り、がんの早期発見と予後の改善▽治療後のフォローアップおよび転帰の改善▽早期治療による医療費削減の可能性が考えられるとし、マイナ

ス面としては、▽スクリーニング検査として使用した場合は、(顕著に) 過剰診断や過剰治療が増加し、特定疾病保険金請求

の発生率、医療保険の給付金支払増加につながる▽直接消費者に提供される検査や告知を必要としない検査として利用可能な場合がある逆選

択拡大の懸念が考えられると説明した。

②では、ほとんどの症例でがん既往者の死亡率は短期的に上昇し、その後低下するため、超過死亡指数を適用すると初期段階では死亡リスクを過小評価し、長期追跡調査ではリスクを過大評価することとなるとした。よ

って、超過死亡率 (%) emiology and End Result) を使用してがん既往者のリスク評価を行っている」と説明し、SEER データから乳がん (T2N0M0 20歳〜65歳) 全体の超過死亡率を見てみると、診断後一定期間は上昇し、その後は低下することがわかった。さらに、ホルモ

ン受容体の状態による乳がん別の超過死亡率比較をみると、ホルモン受容体陰性患者は診断後一定期間は上昇し、その後は低下を示すものの、ホルモン受容体陽性患者は診断後一定期間の死亡

率の上昇はみられず、診断後経過年数に相関して経過を経るほど超過死亡率が上昇すると述べた。

このように、患者の細かな状態により超過死亡率の推移は異なるので、SEER データなどで患者の状態に応じた超過死亡

率の予測をする必要があるとの考えを示した。

④では、大腸がんの SEER 解析結果では、デュックス分類の違いによる超過死亡率推移の相違を説明した。デュックス

分類 A の患者に比べて、デュックス分類 B の患者ではより高い、かつより長期の超過死亡率の上昇が観測されていると述べた。最後に、リキッドバイオプシーは (近い将来) がんのスクリーニングの新しい方法になる可能性がある」とし、生命保険業界は、がんの発生率が増加し、潜在的な逆選

択にさらされることに備えることが求められるとした。また、がん既往者の死亡率の評価は、死亡率が通常とは異なる経過をたどるため、他の疾病とは異なるアプローチが必要だとの見解を示した。がん既往者の死亡リスクを適切に反映するためには、十分な量のデータを含むがん登録情報を利用し、レーティングを

構築することが重要だと総括した。

質疑応答では、講演中に紹介した「リキッドバイオプシー検査の費用」「リキッドバイオプシー

が日本で普及するとして、いつ頃普及されると予想するか」「モラルハザードを回避するために保険会社がとるべき契約上の条件にどのような

の検討されるべきか」といった質問が受講者から寄せられた。

(文責:ミュンヘン再保険会社日本支店・窪田 朋子)